

Title	福澤先生の滞歐手帳
Sub Title	Fukuzawa's journal during his stay in Europe
Author	野村, 兼太郎(Nomura, Kentaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1950
Jtitle	史学 Vol.24, No.2/3 (1950. 10) ,p.1(133)- 41(173)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉五十年忌記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 福澤先生の滞歐手帳

野 村 兼 太 郎

福澤諭吉先生の遺品のうちに一冊の手帳がある。縦十七・二センチ、横七・二センチの黒い革の表紙のついた手帳である。中は黒も何もなし白紙八十二枚。これに先生は細字を以つて滞歐中のことを何くれとなく書き記して居られる。裏表兩方から書かれ、丁度眞中ぐらゐのところ四枚ばかり白紙があるが、他は僅かの例外を除いて、紙面一杯に細字を以つて認められてゐるから、その分量は相當なものである。

先生はこの手帳をパリで求めて居られる。手帳の中扉に貼つてあるレターペルに、

“Fontin/papitier/RN, des Champs 39/Précédemment/Rue Ste. Anne 48/Paris”

とある。先生がパリに到着されたのは文久二年三月九日であるから、この手帳の記事から推測するに、到着すると直ちに求められたもののやうである。手帳の左から最初の頁に次ぎのやうなメモが亂雑に記されてゐる。意味不明のものもあるが、パリの病院に關する覺書かと思はれる。

福澤先生の滞歐手帳（野村兼太郎）

(1)(II) 1

"18 rooms/8 Doctors 100 servants/every Room can pay<sup>(\*)</sup>/32 beds and 2/others Rooms/88 divided/dans chaque D<sub>(不規)</sub> il y a/un Préfet et un ou deus/sons prefets/1800 Beds Paris"

「西航記」三三四十七四の項

「病院を觀る日間に病院大小十三處ある本日觀るものは最大なるものであるが院内を一船に分か一船せ駄子を廻る」

部は婦人を置く各部分で九室となし一室に三十一床あり○病院の事は別冊と詳なり」

もゐる。恐らく前掲のメモはそのもとをなしたものであらう。しかし後に血の鮮やかに、別冊せんの手帳のんじでは  
たゞへ」と。手帳にある前記のメモの三三五ばかり後だ。

「三月朔日朝七時發一時着

11日九時發 Calais 20,000

回一時 Dover 着」

もゐるが、これは四月朔日の誤りである。恐らく日本暦と洋暦との差違のために日附はかなり混雜するところがありたの  
であらう。なんでも使用してゐるのはかゞて當時の日本暦即ち太陰暦である。カレーの次の数字はカレーの人口である。  
従つてこの手帳は大體ペリ到着間もなく求められたものと推定してよ。そしてその後滯歐中始終肌身離さずもつて居  
られ、必要な事柄を書きとめられたものと思はれる。鉛筆で記された部分が最も多くが、ペル、毛筆等もあり、この旅  
行の最後まで使用され、歸朝後もしばらくは用ひられたものが、右から算くて最後の1111葉のところに、次ぎのやうな  
覺書がある。

「三百九十五兩之内三百五十三兩永百五十三文九分引

下谷炎點横丁 組頭 宮田文吉

高橋晋平兄 小森龍助

下谷屋敷一件 田邊へ談すへし

駒込高林寺

鈴木源内 大和御代官

八月廿一日

一傳奏衆より御返有之由

正親町少將長州江爲御使御遣被成不明□爲御迎御守候の人數之内五拾人被指遺旨被迎出候

井伊

松平隱岐

酒井若狭

御名

五拾人江御支度  
として金千兩被下候

全體のうち以上の分だけが歸朝後の記事であり、それらについても多少考證すべきものもあるが、ここでは問題外であるから省略する。その外は悉く滯歐中及びその歸路の記事であるから、しばらくこの手帳を福澤先生の滯歐手帳と名づける。

二

福澤先生のヨオロッパ行については、多くの著作もあり、すでに周知のことであるから、敢てここに詳しく述べる必要もないが、簡単にその概略を述べて置く。幕府はアメリカと條約を結び、萬延元年使節を派遣したが、その後イギリス・フランス、その他のヨオロッパ諸國とも條約を結ぶに及んで、これらの國國からも使節を派遣するやうに要請され、もし派遣するならば、大いに歓迎する、アメリカ以上に歎待しようとフランスやイギリスの公使に勧誘されて、幕府も使節派遣といふことになつたのである。結局文久元年に正使竹内下野守、副使松平石見守、目付京極能登守をフランス・イギリス・オランダ・プロシヤ・ロシア・ポルトガルのヨオロッパにおける締盟六ヶ國に派遣したのである。この使節は修好といふこと以外に、今一つ重要な役目を帶びてゐた。それはロシアと交渉してカラフトの國境を決定することであつたが、實際にはこれはどうにもならなかつた。

福澤先生は翻譯方御雇の一人として、松木弘安（後の寺島宗則）・箕作秋坪と共に一行に加つたのである。前年のアメリカ行と違つて、今回は人の従者としてではなく、役員の一人として渡航されたのである。先生はその時年齢は二十九歳で、一行中でも若い方である。最も若いのは通辨御用で隨行した福地源一郎、後の櫻痴居士及び同じく通辨の立廣作で、何れも二十二歳である。

一行がイギリス公使の好意を以つて、軍艦オーデン号に乗込んだのは文久元年十二月二十二日であつたが、船が長崎を出帆して日本の土地を離れた時にはすでに文久二年一月となり、パリについたのは前述の如く三月、それからイギリ

ス・オランダ・ロシア・プロシヤと各國を廻り、歸途ポルトガルに立寄り、同じく文久二年十二月十日に品川に到着し、翌十一日に上陸したのであつた。故に大體文久二年一杯にヨーロッパ訪問を果したことになる。

この渡歐に關する日記類は比較的多く刊行されてゐる。福澤先生の「西航記」以外にも、副使松平石見守康直の從者野澤郁太の「幕末遣歐使節航海日録」同じく從者市川渡の「尾蠅歐行漫録」及び御勘定格調役兼の淵邊徳藏の「歐行日記」但し淵邊は森山太吉郎と共に一行より後れて、イギリス公使アルコックの歸國に伴はれて文久二年二月二十一日に江戸を出發し、五月二日にロンドンで一行に參加した者である。さらに進物取次上番格御普請役の益頭駿次郎の「歐行記」などがある。何れも日本史籍協會刊行の「遣外使節日記纂輯」の第二及び第三に收錄されてゐる。

これらの日記を彼此對照してみれば、この使節一行の行動をよく知ることが出来るが、それはここで問題ではない。ただ福澤先生の役名について小異の存することを注意するに止めて置く。即ち市川渡の記すところは上述した如く箕作・松木と並んで御傭翻譯方中津藩福澤諭吉としてゐるが、野澤郁太、益頭駿次郎の記載するところは、福地源一郎・立廣作・太田源三郎と並んで定役格通詞としてゐる。未だ何れが眞であつたか確め得ないが、「福翁自傳」等の記事に依つても市川の記すところが正しいのではないかと思はれるので、これに従つた。

### 三

本題に戻つて、「滯歐手帳」を少しく吟味してみよう。先生は手帳の左と右と兩方から書き始めてゐる。左の方の最初の部分は鉛筆で亂雑にいろいろなことが記してある。これに反して右の方は毛筆で大變綺麗に書いてある。私は最初

想像してこれは日本式に最初右から書かれたのではなかと思つた。それは誰でも新しく手帳を手にすれば、最初は丁寧に綺麗に書くのが人情だからである。然るに實際は何となく左から書き始められ、後に落ちついてから右側から記したふしへ、左からの分に片言隻語で記してあるのが、右からの方に立派な文章になつてゐるのが、僅かではあるが存してゐる。例へば右の方には

「To 'harden wood: / melt sulfate of/copper in water/zwaveluur zont/van kaper./Fragile 焼しもの」  
などあるのが、右からの余だ。

「・木の腐敗を防ぐに近年 Sulfate of copper in water を用ひ其法ハ木の切口よりホールベックにて壓するなり  
大略圖の如し。 近年は大船を造る材木も此法を用ひ腐敗を防ぐべし也」

又左からの余だ

「London bridge railway.

No Carriges 1100

" for baggage 3000

" Engean <sup>(sic)</sup> 200

Cost to building of railway per mile from 2000 to 350,000 average 16,000 £

Cost of carriages each<sup>(stc)</sup>

No. 1	300 pound
No. 2	200 "
No. 3	120 "

Engene 2.500—3.000.]

あるのが、右からのみあるては、

「英國ロハシノ橋の鐵路場

此地よりドーフルまで一十八里其外各方ニ枝別し鐵の長サ共計一百里當今此鐵路場ニ屬する車の數左の如し

1等の車	千百輛	價一輛ニ付	三百ポント
1等 "	三千輛	同	一百ポント
機關車	一千百 "	同	一千五百ヨリ三千ポント
荷車	一千 "	同	千一百ポント

此鐵路を建造せしヘ十七八年なり龍動府の鐵路場十所あり共ニ商社の所造ニ係る鐵路を造る一里の價一里ニ付一千ポントより三十五萬ポント平的一萬六千ポント〇龍動橋よりドーフルまで一十八里一人の賃左の如し」  
しかし常にからした手數をかけられたのではなく、間もなく左からでも右からでもふらふらなどを、必ずしも日時の順序に依らず餘白のあるところへでも書いてある。

今おで挙げた例でも解るやうに、いろいろな國の言葉で書かれてゐる。勿論日本語が一番多いが、それに次いでオランダ語である。フランスからイギリスに行かれ、イギリスの議會制度等はオランダ語で認められてゐる。その一部を例として挙げる。

「Parliment.

1 hooger huis

2 lager huis (Common)

de leben van hooger huis bettoon uit Adel, duke, enz. en Bischoffen,

adel 有功の子孫

duke 大名

canselor 十を以て用ラル

(zeyel bewaarder)

De leden van lager huis bestaan 650 speakers (deputys)」

その後オランダ・ロシア等では却つてオランダ語も出て来るが、多く日本語と英語とを使用されてゐる。その外フランス語・ドイツ語・ロシア語等も出て来るが、こゝもでなく、それらの分量は極めて小量である。要するに外國語としては英語とオランダ語とが使用されてゐる。

この種の手帳の常としてその内容は種々様様であり、書かれた順序も前後錯雜してゐる。ただ推測を運うれば、先

生は最初は前に掲げたやうな政治・科學・經濟等に關する新知識の覺書のために、この手帳を使用されるつもりであつたらしい。然るに後にはその日その日の心覺えに變つて來たらしく、五月頃からだんだんと日付入で記されてゐる。從つてこれを整理すると、「西航記」の記述を擴充補足することが出來さうである。

そこで想起するのは、續福澤全集第七卷所載の「西航記」に附けられた編者の註である。

「西航記は福澤先生が文久二年幕府の遣歐使節に隨行して歐洲諸國を巡遊したときの紀行にして、經歷の路程を記された簡短なる日記である。歐洲に於ける先生の視察聞見は別に詳細なる手控があり、歸朝の後これを補足整理して『西洋事情』の著譯として出版せられたのである。」

この文章に従へば編者はその手控なるものを見られたやうである。そこで問題はこの滯歐手帳がその手控と同一物であるかどうかである。ただそこに編者はこれを補足整理して「西洋事情」になしたといつてゐるが、もしこの手帳であるとすれば、到底それになりさうもない。又「西航記」の中に、ところどころ「別冊に詳なり」とあるが、手帳には特に詳なりといふほど書いてはない。もし別冊といふのが所謂手控とすれば、手帳及び「西航記」以外に別冊がある筈である。しかし私は未だそれを見る機會を得ない。但しもしこの別冊といふのが「西洋事情」であるとすれば手控はこの手帳のことである。それを「西洋事情」の原典とみたのは「福翁自傳」の中でこの滯歐中のことを記して、

「だから原書を調べてソレで分らないと云ふ事だけを此逗留中に調べて置きたいものだと思つて、其方向で以て是れは相當の人だと思へば其人に就て調べると云ふことに力を盡して、聞くに從て一寸一寸斯う云うやうに（此時先生細長くして古々しき一小冊子を示す）記して置いて、夫から日本に歸てからソレを臺にして尙ほ色々な原書を調べ又記憶

する所を綴り合せて西洋事情と云ふものが出来ました。」  
とあるのに基づいたものであらう。

「細長くして古々しき一小冊子」は確かにこの手帳と思はれるからこの手帳以外に手控なるものはあつたかどうか不明である。

そこで以下この手帳の内容を紹介するに際し、大體日附の明かのものを中心として、「西航記」その他を参考しつつ、日附順にこの手帳の記述を整理して行く方法を試みやうと思ふ。さうすれば先生の滞歐中の活動が「西航記」を通じて見るよりも、はるかにいきいきとしたものになると思ふ。ただ残念なことには、三月九日にパリに到着してから、イギリス滯在中の四月・五月の日附のある記事が著しく断片的であり、量も少ない。この間は先生がこの手帳を新知識の覺書にてたためであらう。勿論それも「西航記」を参照して整理すれば出来ないことではないが、あまり長文になる恐れがあるので、ここでは割愛したい。

#### 四

日附の明白に記してある最も古いのは前述の三月（實は四月）朔日・二日を除くと四月十八日である。「西航記」のこの日の項にはチームズ河の橋梁及びトンネルのことをかなり長く記してある。ところが手帳の方はこの記事は全然なく、全く別事を記してゐる。

「キングスコルレージ 四月十八日

9—18 age

420 人

九歳より三歳まで

blind sc. 百八十男  
八十女

6 年教 」

と記し、盲目者の數と思はれる百八十男の百と男が消してある。ところが「西航記」には四月八日のところに「キングスコルレージ病院に行く」あるが、ここに挙げたメモのやうなことは何も書いてない。前述の他の人々の日記を検しても、四月八日・十八日何れにもキングスコルレージのことは見えない。他の日記に従ふと四月八日は三使節が各國のミニストルを訪問してゐるし、十八日には外出してゐるが陪從なしもある。益頭の日記には八日には「運上所へ相越す」とあり、十八日には記事がない。これらに依つてみると身分の低い福澤先生は勿論使節と同行せず、同行者の有無は解らないが、單獨にキングスコルレージ病院を八日又は十八日に訪問したものらしい。あるひは「福翁自傳」にあるやうに、箕作秋坪と松木弘安とが年來の學友であるから同行したのかも知れない。

日附の明白な四月の記事はこれ以外にはない。ただこの記事のある頁の直ぐ前の頁に、

“Whitworth

R. S. Garden

福澤先生の滞歐手帳（野村兼太郎）

20 Piccadilly

London "

ヒューム記載がある。Whitworth の何者であるかは不明であるが、恐らくこの前後に先生がロンドンで會はれた人物である。同じ貢に、

「 波傳之事

40 cubic feet Ton measurement.」

たゞしあるから、自然科學に關係のある者かも知れなし。

## 五

五月の記事は各所に散在し、未だ甚だ斷片的である。五月朔日の如きは日附だけで、それに續いては、「ペルリ三世、八百年前 千七百四十八年」の如き歴史の覺書のみである。「西航記」に依ればこの日はタワエル武庫（タワア）を見物してゐるからロンドン塔を見物してくンリイ三世住居當時のことでも聞かれて認めたものであらう。五月一日は「西航記」には何らの記事もないが、手帳には面白じいことが書いてある。

「五月一日 Museum

Past. ○へんべ

額油繪中1尺高1尺五寸11日を費す毎日六時ツ、リ面」

Past や Paste のことかと思ふが、この日先生は大英博物館でも見物されたのであらうか。珍らしく繪のことを記してゐるが、如何にも先生らしいメモである。この五月一日・二日共に先生は一行と行動を共にしてゐない。使節一行は一日に「ブルミニハム、即ちバーミンガムに赴き鐵工場を見物して二日にロンドンに歸つてゐる。

「五月十二日ウールウォツチュ江行くロンドン橋より十一里一週毎三十挺を製ス此の如き已三年」

これは「西航記」の方が詳しい。ただこの傍らに「アルムストロンの裝薬の量」なるものが手帳には記してある。

「五月十三日支那人話

長髪の賊頭 洪秀錢

朱天德ハ已ニ死たり」

この日の記事は「西航記」ではない。翌々日十五日にはイギリスを立つて、オランダに行くので、その準備に急しかつたのであらう。そこへ支那人がやつて来て長髪賊の噂を傳へたのであらう。この日荷物の積出しをしたことは手帳の右から見返しの裏に、

「五月十三日 英より荷物積出し時

一番 大箱 五番 革箱 七番 新箱  
メニツ 外六箱 川崎組合

とある。川崎組合とあるのは同行の雇醫川崎道民と共同の荷物があつたのであらう。翌五月十四日はイギリスにおける最後の日で、「西航記」に従へば再びチームストンネルに行き、歸途セントポールを訪ねてゐる。手帳に

「五百十圓甲 ハルヌール」

← 500 feet by 250

404 ← の幅 ← 】

スル。

「五百十圓甲 舟舟織ア

スル一八三八の名 Bricklayers Arms. 初メ龍動江入る画所なり。一 舟舟火輪車リ 面ウールキ チ江著蘭軍艦 Ardjoenö [アドジンオ] 五百圓甲は織つてゐる船十六十隻開帆

van Woolwich naar Hellevoetshuis is 40 syl van Hellevoetshuis met het yucht van derr Koning naar Rotterdam

---

Ardjeno 120 koppen 500 paardenkrachten

2 80 ponders 6 30 ponders

2 6 ponders 4 draarbussen

150 voeten lang

Kommandant Pels Ryans

1st Officier Abaty

ヘルレフートスロイスよりロッテルダムまで八時行

十時川蒸氣ニ而マース河を溯リ一時ロッテルタム著



和蘭京ニ



日本尊客の



爲ニ恭建

」

オランダ語にて認めたウルリッヂよりヘルレフートスロイスに至る記事以後は十七日のことである。大體「西航記」に整理して記されてゐるが、和蘭の迎船アルデュノの數字は解し難いものがあり、「西航記」には六百トン五百馬力と記してあるが、百二十人乗その他は記してない。又「西航記」には船將の名ペルスレーキと云ふといつてゐるが、ここに示された綴りはさうは読み難い。日の丸の旗の中に文字が記してあるのだが、これは読み得ない。

ここに興味のある記事がその餘白に毛筆で記してあり、その上端に鉛筆で六月十日といふ日附がある。毛筆の記事と日附とは大體無關係と思はれるが、その記事は仲間同士の貸借を記したもので、中にロシアにおいて借用したと思はれるものがあるから八月頃以降歸朝間近に書いたものかも知れない。ただ上記の記事の餘白に書き込まれてるので、敢てここに紹介する。

「六ペンス半の切レヤールド

川崎と組合同人分

福澤先生の滯歐手帳（野村兼太郎）

一ドル

内十フランク巴理ニテ請取る  
英ニテ福池マヘ貸し

一十五ギュルテン六十五仙

ボムホフ・ボタニカ代・  
荷ニテ川崎ヘカンシ

一金壹兩

箕作よりかり

内六分への品三ツ遣しあり

一同三朱

高嶋よりかり

魯にてクーリーへ遣レ節」

以上を線で囲み、その上に恐らくその後に記したものと思はれる違つた筆で、

「川崎ル可來金高 三兩三分ト三分四分六分」

と記してある。川崎は前述の川崎道民、福池は福地源一郎、箕作は箕作秋坪、高嶋は醫師の高島祐啓であらう。

以上の外日附の存する五月中の記事は

「Sémiramis セミラミ

佛政府より送リ船ノ名 五月二十九日羅尼ヨリ聞ク」

五月二十九日は未だオランダ滞在中であるが、ロニイがこの頃オランダにやつて来てゐたらしく。<sup>(註)</sup>

(註) レオン・ド・ロニイはフランス人にして日本語に通じ、日本の事物を好む篤志家である。それについては「福澤研究」第四號

(復刊第一號)に「福澤先生とレオン・ド・ロニイ」なる一文を掲げたから、それに譲りてここには省略する。同文におじてロニイがペリで發行した「世のうはさ」について尾佐竹猛氏の「夷狄の國へ」にある一八六八年版とウエンクスチルンの「大日本書史」にある一八七〇年版とについて疑議あることを述べて置いたが、その後昭和九年に明治文化研究會で覆刻された一八七〇年版の富田正文氏所藏のものを見ると、一八七〇年版は一八六八年版を新たに序文を附して再刊したものの如くである。しかし未だ一八六八年版のものは見ることが出来ず、内容がどれだけ異なるものか解らないが、明治元年に留學した加賀藩の黒川誠一郎などの記事があるところから見ても、一八六八年のものとは全く異なるものであらう。然るにこれを第二號とせず、又復刊第一號ともせず出版したのはどういふわけであらうか。ただロニイの一八七〇年版における序文に「予嘗テ世ノ噂ト名クル一新聞紙ヲ去千八百六十八年創業セシカ其後公私ノ繁<sup>(不明)</sup>シテ暫其舉ヲ廢シせカ云々」がある。

## 六

五月後半から六月前半にかけて日附の明白な記事がない。「西航記」におむても五月十九日以降六月十一日までの間には、ただ六月五日に「使節國王に謁見す」といふ簡単な記事があるだけである。手帳には六月十一日と記した前後同一頁に次ぎのやうな覺書が記してある。

「 Stad Arnhem

蘭より獨江之道

buitengoe

Klarenbeck

ユミリの外莊

六時行四方ヤ、アムツノ

六月十一日

- 1 lage school 一一一歳
- 2 grieksch Latensch 四六歳
- 3 Akademie 四六歳
- 4 Miritari 四歳

duurst 1200

goed Koopst 600 ハレダ」

六月十一日も書くがあなとんのから前の部分は判明しなく。ハリラは女性の名のやうと聞くが、他にもう一度出てゐる。即ち「ハリラの親類、バカの父」とあるだけで意味不明である。これだけで想像するが、六月十一日ヒハリに呼ばれて六時にその別荘か何かに行かれたのではなくかと思はれる。「西航記」には十一日の記事はなく、十一日ヒ「ハリラ」の大學校に行く校の盛なるは他諸邦と異なることなし」とあるから、六月十一日から後のところは、その時に聞かれたものではなかろうか。Lage school は laage ヒト級校、一一一歳ヒツメのは修業年限1111年の意だと思ふ。最後の最高11100、最低100は學資のんヒアム。

「六月十五日 ハーベ

馬鹿院

Geschicht en/school voor/Idioten/(Engelsch/idiots/Duisch/<sup>(sic)</sup>blödsinnige)/dat is, voor alle/Kinderen, die gun  
/gezonde hersenen/en goed verstand/heben.]

「西航記」とは「十五日銅鐵器械局に行へ」「十六日養病院に行く詳なるは別冊に記す」であるから、あるひは日附  
は「日本へゆるのを知れなく。Geschicht 云々トは所謂馬鹿院又は養病院の説明であらが、先生の書かれたものではな  
く。」の後數葉は多くの人の署名と和蘭の政治その他トの聞書が和蘭語で記されてゐるが、それらの文字は必ず  
も先生の筆ではなく。手帳を出して筆談されたのがとて思はれる。それらの記事や署名は甚だ興味あるものでは  
あるが、必ずしも順序を追ふに記されたものではなく、なんせ日附を明瞭に示したものだけを掲げる。

「15 July 1862/Wateringen/P. F. W. Mouton/J. J. C. de Wijs./Jonkk W. F. de Maureanaut/Kanton Regles  
le Naaldnijk/C. Ralock/Burgemeester/van Wateringes/F. W. Marraij/Secretaris/van Wateringes.

#### 右ハーテリケン風車局の社中」

最後の一行はともかくもなく先生の筆である。署名には甚だ読みにくわるものあるから、あるひは誤讀もあるかも知れ  
ない。このハーテリケン風車局に行かれた七月十五日は即ち舊暦の六月十八日に當る。島や辺の「歐行日記」を見  
ると、その十八日の項に、

「箕作氏福澤氏共に馬車に乗りて風車にて材木を鋸裁する場所に到る是は政府の用にて建たる也此局の長は老人にて  
我等を待遇する事至て厚し風車を案内して見せ委しく法を示せり[¶]」  
とある。「手帳」には上述の署名の外に別のところに同じハーテリケンの人と思はれるものが七名ばかり挙げて

ねるが、その前に、

「六月十九日 葡萄園 八十度」

とある。こゝでも日附が一日づれでゐる。葡萄園といふのは食後一同散歩した園のことだ、八十度といふのは溫室内の溫度であらう。淵邊の記述は詳細であつて、「葡萄口に熟して數百房を垂る長さ八九寸なり如此して養ひ世上未だ熟せん」と賣られ價貴しといふ價を問ふり「一房五ギュルテンといふ」などと記してゐる。

一行はその翌日六月十九日オランダを去りアーディッシュに向ふ。

「六月十九日 朝八時ベーゲを發す

door Delft en Schiedam

+11時ヨトンフト著

11+11日朝九時同所發す」

11+11日は11+11日の誤りである。こゝに續けて珍らしく次の如くフランス語で認めた一節があるから敢て引用して置く。

「La première ville/en Prasse de Holland s'appelle/Emmerich/sur le Rhin.」

六月11+11日の日附の後には自然科學に關するもの、地名等の覺書が違つた手跡で記載せられてゐる。「西航記」に従ふところの日本有名な舎密家ミルドルに遭つたことになつてゐる。11+11日にヨトンヒトを立て、その日の午後五時にコルンに著した。「手帳」だ、

「Hendrik von Siebold 10

コールンラ面シーボルトの妻及其一女一子ニ遇る」

と記してある。ヘンドリック即ちハインリッヒはかのフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの「男である。その年三月父フィリップは日本を去りてベタビヤを経てオランダに向ひつた。未だ歸國してゐなかつたので日本人一行に遭ひに來たのであらう。「手帳」の署名はヘンドリックの自筆かと思ふ。數字はその年齢である。ケルン滯在は11月11日の夜だけであつたから面會は短時間であつたと思せられる。

「11月11日朝七時コルンラ發し『ミルヘル』を經第一時ベノーフルを越し六時頃 Magdeburg に遇る同所に大河あら Elbe と名く七時 Brandenburg を過九時ベルリヒ Hotel Brandenbrug に着待遇甚厚し

11月11日

11月14日

別林武器庫に砲數 630,000

「西航記」11十九日の條に病院コリシーに行別林府最大の病院云々とあるのは「手帳」には、

「Charisie/<sup>(sic)</sup>1,500 person/50 Doctor

1月の入用 200,000

六月廿九日病院を尋

15 years セムイナム死後

福澤先生の滯歐手帳（野村兼太郎）

大抵七十歳 六十九か或へ六十八なり

Dr. Lauer プロイスクの待醫の話なり」

とあるが、その時の覺であらうが、意味はあまり明瞭でない。その晩ダンスのあつたことは「西航記」には記してゐな  
い。

「六月一十九日晚 ダンス Kroll ムルヘ」

毎日には養聴院と牢獄を訪ねてゐる。

「六月三十日 養聴院 118 kinderen.

同 罪人 Zellengefangniss/Berlin/460」

四六〇は當時在獄の囚人の數である。この日の記事は西航記の方がずつと詳しい。

七

「七月朔日

Fnoaleden Huis 老兵卒を養フ場 1848.

ラップスタンド 老卒五百人 壱人ニ付4ターレル一ヶ月

ロイテナント 十ターレル

カピテン 一十ターレル

アーマー

三十一ターンル

ピロネル

五十タ

ローバンタム

二十二ターンル

「田舎の鐵製局は、この分の覺悟も頭がいい分は、

」 Albert Borsing

Moabis b. Berlin

Alfred Golsius

セモリ田 鐵製造場は、

「駄知は飛んで、鐵製局の持の血筆だね。

「half of the ground row clee and half of the burned mint with water will give a good Chamotte stone

9 parts of graphit/6 parts of ground clee/3 parts of ground burned clee/mixed with water/will give a good/melting pot.

20,000 每田鐵を費す

800 職人

1200,000 一歳炭を費す

3 蒸氣車を一週の中ニ製す」

再び日附の錯誤が起る。かつ少しく諸所に散在してゐる。暫く「手帳」の日附に従つて述べて行くこととする。七月三日には「西航記」に従ふと鐵筆製造の局に行くとあるが、「手帳」には

「七月三日 ブッフ」

とあり。以下一頁ドイツ語で der Marmorsön ようや文字で始まる何か大理石に關する詩の如きものが記してあるが、勿論先生の筆ではなく、ドイツ人が書いたものと見られるが、判讀し難い。續けて次の頁に、

「別林ユリヘルシチ

七月三日

1 Professor/Magnus.

200 フロフュッソル

1,000 書生

と記してある。「西航記」に従へば大學に行つたのは五日になつてゐる。さらに全然飛び離れたところに、

「マルムルの終ニ加るもの 七月三日

三食七水 三滴牛膽 カンフル少し」

前にあるドイツ語の文章と關係があるかも知れないが、この日本語も意味不明である。マルムルを Marmor 以外に宛

これはめ得ぬでイツ語を思ひつかない。

七月廿四日は「西航記」に従ふる、議事堂を見物したが、これに關して手帳には、

「 議事堂

352 member

ト露

120

ト露

3001 president

2 vice "

4 (不明) "

ルツベツ申あぬだらば、七月廿四の日空のあぬんのば刻へ點たつた記事があ。

「七月廿四 魯カムハムー Cronstadt. リ著夫ニ Neva 沢ヌルニ Petersburg 著ル Neva 沢ヌルニ小火輪船たる

Le Baron Frederic d'Osten Sacken,

Adjutant Capitaine Lieutenant Basile Majaiskij

右國人魯カムハムー七月廿四ハヤハ船團リ面會テ  
トロムトから來た迎使に面會したのである。ハヤハ船團とはのは未だ考く得な。NQ NELは「西航記」に

はな。かくして十日柏林を出發トロムトと面會。

福澤先生の滞歐手帳 (野村兼太郎)

(1用中) 11月

「七月十日朝八時

別林を發し十・一時 Statin ハ著商人仲間の兩替場ニ而會食す會食の人一百七十人三時蒸氣船一隻ニ而 Oder 河を下り七時 Swinemünde ハ著魯の軍艦 Smeloy ハ乗リ直ニ開船す

別林よりステッテンまで獨里法十八里ステッテンよりスキンテニアハダまで八里

十一日 十一日 十二日

六時 Seskar 小島を見る燈明臺あり此よりコロンスタートまで四十里 燈之高サ百六十フート

Smeloy ノ機關四百五十馬力大サ一千一百一十六トン船將の名 Levitsky

カラスナヤガルカ (Red mountain の義) を見船右傍ニあり此所より傳信機あり而コロンスタート及びペールスピュルクニ達スと云」

以上の記事は大體「西航記」と同様である。ただスマロイの噸數が一千一百一十九トンになつてゐるが、これは誤植であらう。「西航記」には十四日・十九日に記事があるが、「手帳」にはなし。これに反して「西航記」に記事のなし十日に次ぎのやうな記事がある。

「七月」十日帝宮を見る魯のハーフルネメント五十一あり國帝即位之時ハ各州より黃金盤壹個を送るを例とす其黃金盤數百個あり一室ニ置けり

1835 帝宮燒失し

1840 再建

「 墓より 1815 の間と名へ」

この帝宮見物は「西航記」とは11月1日のことになりてゐる。この外に全く別のところに次の記事がある。

「 七月11十日ヨーロッパと談話

各國のミリバトル來ル時、其各國の證書を持來る住居へ各ミリバトルの勝手次第なり

魯規式頭取 Sergei Sergeevitch Scheremetieff

maestre de Ceremonie

同 士官 Theodore Andreyewitch Wolff

魯の宮女六人此く駐リ知事、外臣十五人あり此へ常駐、あいす皆高官の妻子を雇ふるなり此員へ唯佳時吉日

この最後のところ、「此所へ各國王自己費用之條」加々べし」として書入れが同じく鉛筆を以てしてある。同じく先生の筆であることは明かであるから、「西洋事情」でも作られる時に書かれたものであらうか。しかしこの外にはがうじや書入れは見當らない。ヨーロッパの何人であるかは未だ考へな。

「七月11十五日

Kausnoe Zelo/Het leger

カラスノイ調査

福澤先生の滯歐手帳（野村兼太郎）

(159) 117

カラズノくヘ伯德府西南十八里（英里）ニあり「ペタイロン七百人 四十ベタイロンノ内十一ベタライフル備  
平時三ベタイロンを以「レシメントとす事あれ、ヘ四ベタイロンを以て「レシメントとす」

魯國惣兵之數六十萬伯德府にあるもの四萬余一歳之間四度大調練あり此時ヘ皇帝自から號令す」  
この記事は「西航記」の方がずつと詳しき。その外、七月一十七日・一十九日の日附が散在してゐるが、その前後を參照しても何故にここにその日附があるのか不明である。勿論その前後の記事のうちには興味あるものも少くないが、今は割愛する。

## 八

八月に入つてもなほ一行はロムアに隸在してゐる。八月一日に學校を參觀してゐる。

「11日スコール Gymnatic and commercial school

12 groste—daarvan 7 zyn gouvernemente school」

「れだくは明瞭でなくが、「西航記」を參照かねば明かにならぬ。

「伯德祿堡に學校の大なる者十一所あり内七所は政府に屬し」

がその意味である。「手帳」の斷片的記載をつぐむ。

「んの外色々小學校あり

150 書生 (内五十寄宿生 25 先生 7 classes 内 1 ベチミナチーク

八歳より十八歳まで此よりユニフルシチ江行き或ハ一業をなす者なり」

この頁の次頁にある次ぎの記事はこの時にその場で記したものかどうかは解らないが、關係があるから掲げて置く。

「書生を三等ニ分く第一等ハ朝九時より來り晝十二時家ニ歸食後二時より再來リ夕五時歸る此者ハ一歳百二十ルーフルを拂第一等朝九時より來り校内ニ而中食し五時家ニ歸る此者ハ一歳の學費三百ルーブル第三等月曜日より來り學校ニ眠食し日曜日家ニ歸又月曜日より來ル此者ハ一歳ニ五百ルーフルを拂ふ□□ハ政府の學校ニはあらず政府ニ屬する者ハ此より安しと云」

これらの點については「西航記」には全然記載していない。

「八月五日ホルチヒケーション

巾壹間長間斗バツテーラ壹尺斗の大砲雛形四門ペートル帝自所造」

「西航記」には八月五日の記事がないので、この日どこを見物されたのか不明である。ホルチヒケーションは fortification であるが、「西航記」には翌八月六日磁器局玻璃局に行くあるが、「手帳」に「魯磁器成分」として、  
「Common Sand/<sup>(sic)</sup>Dutsh Sand/Potassium/Nitrum/Oxydium plumbi/rubium/Latin/Lime」

とある。その下に毛筆で「八月六日蘭通話」とあるのがある。蘭通はオランダ人の通譯の意とすれば、オランダ人でロシア語の出来る者でも一行について來たものと考へられないともなし。明かでない。その話としては次ぎの如きものである。

「魯西之者ハ戸籍之法甚嚴なり外國人ハ魯西亞ニ來り住むこと三年ニ而魯の戸籍ニ入らんと欲する者あれハ此を許

國內の者ハ決メして化内の人たるを許さずパスポートと云ふる政府の書附ありて國內の人民ハ皆此を持たるを得ず外國ニ出る者ハパスポートの外別ニ證書を與ヘ五年を限とし其期至れハ再び官ニ願ひて延期す此の如くすれハ長く外國に滯留すべしと雖とも其國の戸籍ニ入ることを許す若し外國ニ而娶リ子を生ミ其子ニ至リ外國の戸籍ニ入らんことを願へハ許すことあり若し此願なけれハ縱令他國ニ而娶リ他國ニ而子を生むと雖共母子共魯西亞の戸籍ニ屬するを法とす又タ國民他國ニ行くときハ他國ニ在る年限丈ヶ之家稅地稅を預メ一時ニ政府(ニ)納め置く

翌八月七日には鑛山學校を參看した。

「八月七日 マインスクール

學生貳百人 教師四十人

此夕風船ニ乗過る者を見る」

「西航記」にはこの風船のことを翌八日にかけてゐる。尤も手帳にも直ぐ傍らに八月八日とあり、此夕は八月八日の方にかかるのかも知れない。即ち「手帳」は八月八日九日と連記して、その後にメモを記してゐる。九日には博物館を見物してゐる。そのメモは

「Pinna 本邦のタテガヒ此貝の外面に毛あり此を以てメリヤスを製すべし 此物地中海より出で

Zoologische Museum in St Petersboarg

(出下にロシヤ字にて記あるの省略一筆者)

此博物堂ニ大地球の雛形あり中經十八フート。耳曼の侯より魯帝へ獻せし物と[K]

その他 111 の記載略す。十四日には醫學校に行く。

「 十四

Medico-Surgical/Militair Academy/22 Professors/Ordinary/727 Students/

Tsaar 魯ペーネルのチートル未だ帝位を定サル時

Tsaardam ハ所和蘭リハペーネルの古跡ある

「西航記」に醫師スミッカの話としゆるのを八月十一日の條に記してあるが、「手帳」には日附がない、ただ「魯ト  
クダルスミッカ話」として「西航記」より簡単な記事を掲げてゐる。

「田耳の人 Han トシル者」十一年中亞非利ニゲルの都 Sudan リあり宗旨を教へ先日伯德府へ歸り金を集め再行け  
り此人始ニケルリ至リ時其所の帝肥たる人を贈り食はしめんせり此地ニ而ヘ今ニ而モ常ニ人肉を食ふ事獸肉と異  
なることなし」

「西航記」に記事の何もなし十二日に次如のやうな記事がある。

「十三日晚 婦人來り奏樂 hand harmonika

hand harmonika ハハハの樂器を聞く此器田耳曼より來る者トシ最可耳」

これがハ「手帳」と書かれた「音樂話」である。翌十四日は圖書館を見物してゐるが、それに関するメモは、

「八月十四日 書庫

90,000 40,000 handschry

九十萬 板本 四萬 寫本

魯のモスコーリ而初而板本を造る 1564 又

1491 此へ外國而出版

1440 獨逸ニ而出版テテン語の書此を歐州第一の板本なり」と

その晩エラゲン嶋に行つたことと/orては一頁後に、

「八月十四日

カラケン宮に行く此日帝即位の日毎年例依て盛ニ樂を奏し花火を設く」

もあ。この記事と同じ頁と、

“Wednesday we shall go to worm bath”

とあるが、本當にロシア風呂に行かれたものかどうか確かでない。「航西記」にも何もなく、十六日に江戸における東漸寺の浪人襲撃事件を知つた旨が記されてゐるだけだ、十七日の記事になつてゐる。「手帳」の方も同じく十七日まで何もなし。

「八月十七日 ロローンスターの鐵製局

モントルの鐵板 4.5 in. 20 f. long. 3.3 f. l. の者をロローンスターニ而見る

武庫の砲數 ライフル小銃一萬一千外六萬小銃あり〇大軍艦エムペロルニコラーと云ふ船を觀るスクルーフ機關六百

馬力船長サ二百五十三フート巾四十九フート深サ六十フート大砲百十一門

コローンスタッフトバツテレーへ石なり厚サ十フート

ヅライドック伯德帝所造○メリマックを造り一隻ハ已ニ成リ今又一隻を造れり未タ不成先ニ士官二三名をメリケン江遣し實物を見せしめりと[所]

メリマックは monitor のんじふる。かくして一行はロシアを去つて再びドイツに向ふ。

「八月二十四日朝

第十時伯德府を發しロワを過ぎ第四時半ピスコッフニ着し中食す伯德祿府よりピスコッフまで一百一十里魯里中食の間一時五時發し夜十二時半 Kalukon カルコンニ而食し通夜走行し翌一十五日朝七時 Kowno ニ著し朝食す之朝所見の山水清明可愛伯德近傍の地ニ異なり伯德府よりカルコン凡四百九十三里なり○コウノニ鐵橋あり長サ三百間最壯大なり○伯德府よりコウノまで七百六十二里伯德府より國界まで八百四十里第十時國界ニ著す Ejottkuhnen ハ素領ウェルスボロウヲヘ魯地ニテ兩地相接する所なりエヂトクネンより別林まで獨逸里法百七里魯里第一時半エヂトキューーンを發し第四時過ぎコーリンクスベルを過ぎ霄第九時 dirschau に著し食すチルシヨーの入口ニ長鐵橋あり長一千六百五十四獨フート橋谷 Lentze Weichel 河名シルヨーラより別林江六十四里同所より王山江二十一里」  
王山江 Königberg のルムジムル。

「二十六日拂曉フランクホルト江著し車中茶を飲ミ

二十六日朝第八時別林著ホテルフランデンヒュル江再宿」

一日休息して、

「同二十八日第二時火輪車ニ而發すマーグデブルグを過ぎ夕第六時ヲツセルスレベンに休し車中茶を飲む此所ハ初度別林に至る時ア水を食ひし地なり(「西航記」には水菓子とあり)第七時ブリュンスウェキを過ぎヘノヲーフルを過ぎ第八時ミンデンにて車を下り食す翌二十九日拂曉六時半コロンニ著し車を下り茶を飲む八時フルブヒール江著し車より出食す此地ハベルギー領なり佛よりシラール及ヒバーリュの使節迎とし來れり四時 <sup>ア</sup>charleroy を過ぐ此所製鐵甚多し高竈數十あり四時半 Zeumont を過ぐベルギーフランスの國界なり暮 <sup>ア</sup>quenten を過ぐ」

この日パリ到着、これの記事は「西航記」と大同小異である。

「八月晦日 Madelena 建造以來十八年マルマルの像あり高サ貳丈巾貳尺人物六個あり

○唐學壇来る(毗德囉呢)清朝恭親王の滿洲名。Mr. Ward なる英人江ゼネラールの官を與兵卒八千人を教るル  
○漢口の商人六萬員を米理江送モニトルヌリマック一隻を買に遣せしと(一員の掛目銀七匁八分)

恭親王の滿洲名は「西航記」には毗噠呢とし囉の字なし。

## 九

文久二年は八月が閏月である。いよいよ歸途につく使節一行は最後の見物と歸路の用意とに急しかつたらしく。福澤先生は例のロイを相手に多忙の日を送られたらしい。

「閏八月二日 羅尼話

伯德府ニ而橘耕齋を見ると曰

橘耕齋といふのは増田甲齋ともいひて、掛川藩士、浪人して日本で殺人罪を犯し、安政元年ロシア艦ヂヤナ號が下田で沈没した際に同艦の乗組員ゴシュケウイッチに近づき、終にロシアに渡り、日本語學校の教師をしてゐた。ロシア名をウラジミール・オシグオウイチ・ヤマトフといふ。使節がロシア滞在中かげにあつてその接待に心を盡したといはれる。明治になつてから日本に歸り、十八年に死んだ。

「閏八月三日羅尼と共に書庫を觀る巴黎に書庫七所あり今日所觀最大なり書冊百五十萬卷此書を並る時ハ長七里なるく」と<sup>ル</sup>アカデミーに行く Institute de France と<sup>ル</sup>此學校の最高上のものニ而社中四十人あり學科五種ニなる第一語學第二歴史第三（究理學を消し不明の字を一字同しく消し、學である。「西航記」に從へば術學）第四政學究理第五技藝

この記事のもととなつたメモと思はれるものが全く離れたところに記載してある。

「Akademie/Institut/academies/1 Language/2 History/3 Sciences/4 Politic and Philosophy/5 Arts (ヨーロッパ) 字不明」

「アカデミーのメムブルハ四十人を限とす今のナポレオン此社中へ入らんと願へとも難し」と<sup>ル</sup>アカデミーハ佛を第一と<sup>ル</sup>龍同第1日耳曼第三伯德府第四

龍同はヨーロッパのことか。

「佛の書院書數百萬余書を并べ長サ七里なるくし英の書院にハ八十萬と云佛の書院を世界第一とす李魯生第一 [英第三]

福澤先生の滯歐手帳（野村兼太郎）

伯德府第四」

これらの知識の大部分はローリーから得たものであらう。

じよしょ出發とし前夜先生はローリーから當時のヨーロッパの政情等を聞かれ、これをその手帳に書きとめられた。  
「閏八月十一日夜羅尼話」がそれであるが、それらは前述の拙稿「福澤先生とレオノ・ド・ローリー」に述べて置いたか  
ら、なんどは原文のみを掲げぬ。

「魯ベ只アジアのみ○スウキテンベ魯より取らたるものを取返さんと欲す仮ヘスウェーテンを助くる故ハスウェーテン  
王く仮人なり○テーネマルカ常ニ仮ニ与すフロイセンベテーネマルクの一部を取らんと欲す that is called Holstein's  
question ゼルマンの人民くいたふんとを欲す此事ハ仮英魯の爲メニ甚た惡し恐らくベ李漏生王セルマンの帝たるく  
し此事ニ付てベヲーストネーキハ而已難物なり且佛近傍の諸国の王ハ仮帝の親属なり事あれハプロイセンニ敵となるべ  
し

「La question des frontieres du Rhin. 仮帝ヘレンイン河西を取らハ李王ニ全日児漫を取るを許すべしグルギーへ之  
を知るが此節 fortifications d' Anvers ムシル所江盛ニ堡を築き仮を防ぐ爲せり元トグルギーハ仮の助ニ由リ國立  
テたれども今ハ荷蘭と共に仮ニ敵となんと欲す○ナポーランハ常ニ英ニ revenge せんと欲す然とも歐諸洲の服する  
を得事を行はんと欲す昨年ナポーラン英を侵せんと風聞あり此時英の議事ニ而英全國の周囲ニ堡を築かんとする議あり  
此事を Question of defence of English Coast へ名く

「○ Vittoris Emanuele. 以前サルチーノ王たり今ハ全イタリヤの領主、カルヘルチハ元トニッサノ人なり先日フ

ヒットリヲエマニユエルの為捕、フクトリヤマニユハ元ト佛江ロンバルチヤヲ与ヘタルニ由リ今ナホレヲンと甚た親し  
仏帝ハ又サルヂニ島を取らんと欲すフヒクトリ若し此を与ヘハ仏帝よりロムヘ遣したる兵卒を引きフヒクトリヤを使し  
ロムを取らしむべし

「○FAMILLE DES BOURBONS ヘ仏國の古の帝属なり今此姓のもの多く伊斯巴ニあり現今伊斯巴の女王ハボル  
ホン姓なり故ニナホレヲン伊斯巴王を立テ置くことを欲せすホルカル王をして全伊斯巴を取らしめんと欲すと云故ニ葡  
萄王ハフヒクトリヤマニユエルと親しく伊斯王ハポープト親し○仏魯ハ土兒格ヲ滅し其民を盡く亞細亞ニ送らんと欲す  
然とも英ハ独リ之ヲ欲せず其故ハ魯の之取ること恐るゝなり又ギリーキも土兒格滅ヒハ之を已の有とせんと欲す○仏ナ  
ボレヲンハ都てアメリカ合衆治政を止め一王国と為さんと欲す各々北アメリカニ限らず都て南北メリケンとも王国とせ  
んと欲するなり○メリケン南北の戦も昨年より南方勝利なりナボレヲンハ南方江私ニ金を与ふと云

「ペルシャハ只今勢なく然れども遂ニハ魯英のものたるへし一二三十年の内ニハ必ス亡ふべし其国の宗旨ハ回回宗フイ  
／＼なり五六年魯と條約し軍艦を持つことを止メたり此事甚惡し○印度ハ大抵英の有なり然とも印度人ハ英の政治を恐  
む○ビルマン滅ひたり英之を取りれり○シヤムハ仏を慕ひ英ヲうらむシヤム王ハ好き人物なり然りとも国人の風俗甚惡し  
○交趾ハ仏より已其一部を取り三月前條約をなしたり。」

又この手帳にはロニイ自筆の日本語なども存してゐる。

「閏八月十二日晩第九時巴理を發し終夜蒸氣車ニ而翌十三日朝八時ロシフオルトニ着此所ハ佛の海軍港ニ而港内ニあ  
る船ハ皆軍艦のミ蒸氣車より下り直ニ佛の送船ニ乗る」

これに註記して「把理よりロシフオルト江九十リーグ」とあり、又全くそれと離れたところに、

「Fransch corlogstrans postship Rhin 160

閏八月十三日乗込佛艦の名」

とある。

「車會所より海岸まで十町餘往來盛護衛の士を列せり表敬乎示威か 能家來 此夜川口ニ一泊翌十四日朝第十時碇を起すロシフオルトよりリッサボンまで海路佛里法ニ而七百五十里〇十五日昨夜より蒸氣を止メ帆前のミ船進むこと少し夜浪高く船動搖甚し終夜眠ニ就かず十九日晚第九時より蒸氣を始む廿日朝第十時蒸氣を止む二十一日朝始て陸を見る第十時又蒸氣を始む二十三日第四時ホルトカルリッサボンの港に入り碇を投すタ第六時上陸旅館フラカンサホテルニ宿す」

この二十一日切めて見た陸地に

「スペニーの岬フヒニストレルレ」

と註記してゐる。「西航記」においてはこれを「十日のこととしてゐるが、二十一日の方が正しいらし。このスペイシの沖で愚圖愚圖してゐたことは實際氣の短い日本人にとつてはかなり耐へられないことであつたらう。淵邊は「あたら海にあたら月日を漂て歸る日數の限り知られず」「いそきても風にまかするうき船のうきは此世のならひなりけり」と自ら慰めてゐるが、流石の先生もあまりにも遅遲として進まないのに飽き飽きされたのか、次ぎのやうな一篇の詩を「手帳」に記されてゐる。

「朝漂斯スペニ把洋暮漂斯把洋

十日又十夜漂邊斯把洋

閏八月伊斯把洋舟中」

それでも漸くリスボンに到着し、ヨオロッパ最後の目的の國ポルトガルに辿りついたのであつた。そこに二十三日から九月三日まで滯在したのである。

## —○—

「手帳」にポルトガルに關する聞書が一箇所ある。即ち

「ポルトガル九月朔日  
ホテルニ而聞ク

蒸氣機關ハ二十四五年前より英より來ル五十年前ハフハブリーキなし○瓦斯ハ十二年前より始る鐵道ハ八年前より始皆英商社の造る所なり方今ハ鐵道を政府より買ひたり瓦斯ハ英の商社の造る所なれとも方今ハ葡人も此社中へ加はりたりと云○此旅館の主人(英人)三十年此所江英より來ル當時英婦人外ニ出れハ衆人皆後ニ従ひ之を見る蓋し其俗葡人の目ニ新なれハなり方今ハ不然

この聞書もその女主人から得たものであらう。そのホテルの名當も「手帳」に書き留めてある。

“Mrs. Meston Braganza Hotel Lisbon”

先生はポルトガルについてはあまり興味を感じられなかつたが如く、その外には僅かにポルトガルの兵力についてメ

モがあるだけである。

「 9000 軍時

3000 平時

2 軍艦 但し蒸氣

三萬あるべき筈之所 一萬二千より多からず 平時へ三千餘あり

右葡萄牙の兵」

當時の先生としては先進國を先に視察した日を以つて科學的に劣つてゐるポルトガルに對して興味を感じられなかつたのも蓋し當然のことであらう。しかし「西航記」には「手帳」よりは多くの記載がある。「手帳」の方は九月二十六日アレクサンドリア到着まで何らの記述なく、二十六日から二十九日まで記し、十月中記事なく、十一月九日午後第三香港シンガポール着から始まり十一月八日に終つてゐる。その記事は殆ど全く「西航記」と同じである。従つて同様のものを除き、同書に記載のないもの——それはあまり重要なものではないが、一應紹介して置く。

「(十一月) 十六日 逆風

十七日 逆風愈強く船動搖甚けれとも船行疾し

「廿日 サンジヤン(クガ)出航より今日まで交趾地方ニ沿て航海岸を距ること僅ニ半里岸上の山ハ皆巖石草木を生せず

「廿五日 夜第八時香港著 郷書至る」

以上で大體先生の「滯歐手帳」中日附の明白な分だけを日附順に紹介し終つたのである。日附の明白ならざるものでなほ多くの價値ある記述を残してゐる。殊にイギリスの政治についての記述の如き、勿論先生は何らの批評をも下しては居られないが、先生の政治知識を知る上に重要な資料であらう。先生がその「自傳」に徵兵令や選舉法、政黨政治の解らなかつたことを述べて「皆無分らない」とされてゐるが、この「手帳」を見ると相當理解して居られたことが解る。それだけ先生が大なる努力をされたことが推測されるわけである。

上に引用したところだけでも解るやうに、先生が實證的に、數的に物を考へようとする傾向はこの「手帳」に著しく強くあらはれてゐる。主觀的批評は殆ど全くなない。學校を參觀されても、學課過程・教授の數・學生の數・學費等に注意されてゐる。かうした點において先生が後に唱道される實學的精神はほほこの洋行を一期として一つの信念にまで高められたものと思ふ。それらの點についてもこの「手帳」からその他の例を引用して述べるつもりであつたが、時間の餘裕がないので、一應本文においては日附の明かなものを抜き書きしたといふ程度で責を果たしたいと思ふ。又「手帳」が鉛筆で書かれてゐる部分が多いのでやがて磨滅してしまふ恐れがあるので、出来るだけ多く原文を引用しようとした。そのために敍述は冗長となり、徒らに紙數を費したかも知れないが、その點は御海容願ひたい。なほ資料とした「手帳」がいろいろな言葉で書かれ、かつ前後錯雜してゐるので誤讀誤解なきを期し難い。飛んでもない誤りを冒して、先生に對しては勿論、讀者諸君に對して申譯けないやうなことのあることを恐れてゐる。